

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 動詞連用形に後接する「ものす」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉, 寧真 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001480">https://doi.org/10.57529/00001480</a>

# 動詞連用形に後接する「ものす」

呉 寧 真

## 論文要旨

中古和文の「ものす」「ものしたまふ」は、動詞連用形に後接する場合、「来」「行く」「あり」「ゐる」などの代動詞<sup>だいどうし</sup>である可能性もあり、補助動詞<sup>ほじょどうし</sup>である可能性もあるが、判別が難しい。本稿は「ものす」に前接する動詞を調査し、その動詞が「来」「行く」「あり」「ゐる」と複合するかどうかを確認した。そのうえで、「来」「行く」「あり」「ゐる」のなかの一つとしか複合しない場合、「ものす」はその動詞の代動詞である蓋然性が高いと考えられる。また、二つ以上の動詞と複合する場合、「ものす」がどの動詞の代動詞かは意味によって考える。どの動詞とも複合しない場合は、個別に検討する。

その結果、「一ものす」は複合動詞<sup>ふくごうどうし</sup>の後項ととらえるのが原則で、動作主の移動がある場合は「一來」「一行く」であり、動作主が動かないでいる場合は、「一ゐる」である。また、動作の存続を表す場合に限って、補助動詞だと認められるが、源氏物語にはわずか2例しか見られない。

## 1、はじめに

中古和文の「ものす」は、明白な表現を避ける動詞として、他の動詞の代わりに用いられる。動詞連用形に後接する場合、補助動詞とする立場（東辻1997）と、複合動詞とする立場（小田2015）がある。現行の古語辞典では、複合動詞の後項と認めるものはないようで、補助動詞とする記述は見られる。例えば小学館『古語大辞典』は、次のように指摘している（「ものす」の項目）<sup>(注1)</sup>。

〔三〕〔補助サ変〕（前略）②（動詞の連用形に付いて）その動作をする意を示す。「つつまむ所なく、さて入り一・せらるらむは」〈源氏・賢木〉（後略）

すなわち、挙げられた例「入りものせらる」の「ものす」は、前項の動詞「入る」の動作をする意を示し、「入りものせらる」が表す意味は「入らる」とほぼ同じことになる。一方、複合動詞<sup>(注2)</sup>の後項と考える場合は、複合動詞の後項を主体敬語「おはす・おはします」に変えた例と同じように（呉2017）、例えば「入り来」の「来」を「ものせらる」

という敬語形に変えたものと捉える可能性があると考えられる。

本稿では、動詞連用形に後接する「ものす」が複合動詞の後項なのか、補助動詞なのか、また、どの語の代用なのかについて明らかにすることを目的とする。

## 2、調査方法

本稿では、源氏物語を調査資料とした。調査には『日本語歴史コーパス』（国立国語研究所（2018）、以下『CHJ』と呼ぶ）を利用し<sup>(注3)</sup>、異同の確認は『源氏物語大成 校異編』を参照した。表記は一部改めた。引用文中の〔 〕は話し手と聞き手を、《 》は心内文であることを、（ ）は補足説明を、〈 〉は出典の巻名、小学館『新編日本古典文学全集』の巻数-頁数を示す。

動詞連用形に後接する「ものす」を検索すると、「ものす」（4例）「ものせらる」（2例）「ものしたまふ」（18例）「ものせさせたまふ」（3例）の4種類の形が存在し、ほとんどが敬語形で用いられている。そのうち、尊敬の補助動詞「たまふ」が後接する「ものしたまふ」は「おはす・おはします」と同じ敬語体系にあり、より低い敬意を示すと指摘されている（中村1976）。呉（2017）では、「おはす・おはします」は前接する動詞により、通常語形は「来」「行く」「ある」のいずれかであることを確認した<sup>(注4)</sup>。本稿は、まず3節で、「ものしたまふ」が「おはす・おはします」と同じ傾向を示すかどうかを確認する。

それをふまえて、4節で「ものせらる」、5節で「ものせさせたまふ」の前接する動詞を調査し、6節で無敬表現の「ものす」の前接する動詞を調査し、「ものす」はどの動詞の代用なのかを検討する。以下、本稿では、「ものす」に代用された元の語形を「被代用語形」と呼ぶ。

## 3、「一ものしたまふ」

本節では、「一ものしたまふ」が具体的に何の敬語形であるかを探るために、「ものす」に前接する動詞と、その動詞が複合する形式を調査する。その結果をまとめたのが【表1】である。表の縦列は前項であり、横列は後項である。

【表1】

	前項	後項			
		一ものしたまふ	一來	一行く	一ゐる
グループⅠ	渡る	1	3		
	言問ふ	1	1		
	過ぐ	1		11	
グループⅡ	添ふ	1			7
グループⅢ	出づ	5	139		8
グループⅣ	訪ふ	4			
	語らふ	1			
	進む	1			
	隠ろふ	1			
	大人ぶ	1			
	卑下す	1			

全用例を見渡すと、「来」「行く」にだけ前接するグループⅠと、「ゐる」にだけ前接するグループⅡと、「来」「行く」にも「ゐる」にも前接するグループⅢと、「来」「行く」にも「ゐる」にも前接した例がないグループⅣが見られた。次節からグループ順で見ていく。

### 3-1、グループⅠ：「来」「行く」にだけ前接する動詞

表のグループⅠの動詞は、移動動詞「来」「行く」だけに前接する動詞で、動作主の移動が見られる動詞である。

まず、「来」だけに前接するのは「渡る」「言問ふ」の2語である。その2語に後接する「ものしたまふ」を検討すると「一來」の敬語形であると考えて問題ないようである。

(1) [源氏→紫の上]「……思ひの外に、この宮（＝女三の宮）のかく渡りものしたまへるこそは、なま苦しかるべけれど、……」  
〈若菜下4-207〉

(2) 御前に人繁からぬほどなれば、この文を持って参りて、[小侍従→女三の宮]「この人（＝柏木）の、かくのみ忘れぬものに言問ひものしたまふこそわづらはしくはべれ。……」と、  
〈若菜上4-148〉

(1) は源氏が女三の宮の降嫁、すなわち六条院に渡って来ることについて述べる場面である。(2) は小侍従が柏木の手紙を女三の宮に持っていき、柏木が頻繁に言葉をかけに来ることを述べる場面である。いずれの例も、動作主が移動することで、「一ものしたまふ」は「一來」の敬語形であると考えられる。

次に、「行く」だけに前接するのは「過ぐ」である。

- (3) [右近→源氏]「……。夕顔ガ いたづらに過ぎものしたまひしかほりには、ともかくもひき助けさせたまはむことこそは、罪軽ませたまはめ」と聞こゆ。

〈玉鬘3-122〉

(3) は右近が夕顔の死について述べる場面であり、被代用語形に「過ぎ行く」が想定できるが、源氏物語では、「過ぐ」「過ぎたまふ」が「人間の死」の意味を表す例があるのと異なり、「過ぎ行く」11例には「人間の死」の意味を表す例がないため、問題が残る。検索範囲を広げても(『CHJ』平安編、鎌倉編)、「過ぎものしたまふ」はこの例しかないため判断しにくい、「たまふ」は「行く」に後接しないため、「過ぎ行く」を主体敬語にする場合は、「過ぎものしたまふ」「過ぎおはす」「過ぎおはします」にするしか方法がない。そして、以下のように、「人間の死」の意味を表す「過ぎおはします」が1例ある。

- (4) [僧都→冷泉帝]「……。これは来し方行く先の大事とはべることを、過ぎおはしましにし院(=桐壺院)、後の宮(=藤壺)、ただ今世をまつりごちたまふ大臣(=源氏)の御ため、……」とて、

〈薄雲2-451〉

こうした例があることから、「人間の死」の意味を表す「過ぎ行く」は実例がないが、あってもよいと思われる。また、(4)の動作主体は身分が高い桐壺院と藤壺であり、(3)の夕顔が動作主体の「過ぎものしたまふ」より敬意が高い。

以上のように、グループⅠの「一ものしたまふ」は「一來」「一行く」の敬語形である。その共通点は、動作主が移動している点に求められる。

### 3-2、グループⅡ：「ゐる」にだけ前接する動詞

グループⅡの「添ふ」は「ゐる」だけに前接する動詞である。被代用語形を確認すると、以下のような例がある。

- (5) (大君)みづからも、たひらかにあらむとも仏をも念じたまはばこそあらめ、《……。この君(=薫)のかくそひゐて、残りなくなりぬるを、今はもて離れむ方なし、……》と思ひしみたまひて、

〈総角5-323〉

(5) は病中の大君が、薫がそばに付き添っていて、隔てもなくなつたと考えられる場面である。「ゐる」はもともと「座る」の意味を表すが、複合動詞の後項の場合は「じっとしている」「動かないでいる」のように、動作主の動きがないことを表す。(6)の「添ひものしたまふ」は式部卿宮が娘に、体裁悪く縋り付くなど説教する場面である。「添ひものす」は「付いていて、動かない」の意味であり、「添ひゐる」の敬語形であると考えて問題ないようである。

- (6) [式部卿宮→鬚黒の北の方]「今は、しかいまめかしき人(=玉鬘)を渡しても

てかしづかむ片隅に、(アナタガ) 人わろくて添ひものしたまはむも、人聞きやさししかるべし。……」とのたまひて、〈真木柱3-358〉

以上のように、グループⅡの動詞「添ふ」は動作主が動作をした後に、じっとしているか、動かないでいる場面であり、「一ものしたまふ」は複合動詞「一ゐる」の敬語形である。

### 3-3、グループⅢ：「来」「行く」にも「ゐる」にも前接する動詞

グループⅢの「出づ」は「来」「行く」にも「ゐる」にも前接する動詞である。「一來」「一行く」と「一ゐる」との違いは動作主が移動しているか、動かないでいるかで分けられる。これをふまえて敬語形を見る。

(7) げにいかさまに作りかへてかは、(源氏ニ) 劣らぬ(若宮ノ) 御ありさまは、世に出でものしたまはまし。月日の光の空に通ひたるやうにぞ、世人も思へる。

〈紅葉賀1-349〉

(7) は源氏と似ている若宮の出生について述べる場面であり、「出でものす」は「生まれる」の意味である。「出で来」は「出てくる」「現れる」「生まれる」の意味であり、「出でゐる」は「出て、外にいる」の意味であるため、被代用語形は「出で来」である。「出でものしたまふ」は5例あり、すべて「生まれる」の意味であり、被代用語形は「一來」であると考えられる。

### 3-4、グループⅣ：「来」「行く」「ゐる」に前接しない動詞

グループⅣは「来」「行く」「ゐる」に前接する例がない動詞であるが、そのうち「訪ふ」「語らふ」「進む」「隠ろふ」に後接する「ものす」は複合動詞の後項であると思われる。

(8) [源氏→柏木]「……、そのことをだにはたむとて、拍子ととのへむこと、また誰にかはと思ひめぐらしかねてなむ、月ごろとぶらひものしたまはぬ恨みも棄ててける」とのたまふ御気色の、〈若菜下4-275〉

(9) 御息所(=落葉の宮の母)、「……、この年ごろ、さるべきことにつけて、(夕霧ハ) いとあやしくなむ語らひものしたまふも、かくふりはへ、わづらふをとぶらひにとて立ち寄りたまへりければ、……」と聞こえたまふ。〈夕霧4-416〉

(10) [源氏→夕霧]「(内大臣ハ) 思ふやうありてものしたまへるにやあらむ。さも進みものしたまはばこそは、過ぎにし方の孝なかりし恨みも解けめ」とのたまふ、〈藤裏葉3-435〉

(11) [弁の尼→薫]「……、(浮舟ハ) このごろもあやしき小家に隠ろへものしたまふめるも心苦しく、すこし近きほどならましかば、……」と聞こゆ。〈東屋6-86〉

(8) は源氏が柏木に、訪ねてこないことを責めている場面であり、動作主の移動があるため、「一来」の敬語形であろう<sup>(注5)</sup>。(9) は御息所が、夕霧が親切に言葉をかけて来て、見舞いに来ると述べる場面であり、「一来」の敬語形であろう<sup>(注6)</sup>。(10) は内大臣が夕霧を宴に招待し、そのことについて、源氏は内大臣が折れて、よい関係になるようにもちかけて来るとして語る場面である。「一来」の敬語形であろう<sup>(注7)</sup>。(11) は弁の尼が、浮舟は三条の家に隠れて、そこにいると述べている場面であり、動作主は「じっとして、動かないでいる」ため、「一ゐる」の敬語形であると考えられる<sup>(注8)</sup>。

その他、動作主の移動の意味も認められず、動作主が動かないでいることを表すのではない2例がある。まず、「卑下す」を検討する。

(12) 女御の君 (=明石の女御)、ただ、こなた (=紫の上) を、まことの御親にもてなしきこえたまひて、御方 (=明石の君) は隠れ処の御後見にて、卑下しものしたまへるしもぞ、なかなか行く先頼もしげにめでたかりける。

〈若菜下4-167〉

(12) は明石の君の態度がへりくだっていると述べる。動作主の移動もなく、「へりくだって、じっとしている」とも解釈できない。したがって、「一来」「一行く」や「一ゐる」の複合動詞の後項とは考えられず、動作の存続を表す補助動詞ではなからうか。

そうすると、補助動詞である場合の被代用語形として、以下の三つの可能性が考えられる。

- ① 「一あり」の敬語形である。
- ② 存続の助動詞「り」の敬語形である。
- ③ 「一ゐたり」の敬語形である。

まず、可能性①を検討する。中村(1976)では、地の文における単独の「ものしたまふ」は、ほぼ「あり」の敬語形であると指摘している。複合動詞については言及していないが、その可能性も考えられる。しかし、複合動詞の場合、「あり」は他の動詞に後接しないため、「一あり」の敬語形とは考えにくい。

次に、可能性②を検討する。存続の助動詞「たり」が「ておはす」で敬語形を作るように、「ものす」を「り」の敬語形であると想定してみる。しかし、(12)には「り」が後接してあり、「ものす」を「り」と考え、被代用語形に戻すと「卑下せりたまへり」になり、この形はあり得ない。

最後に、可能性③を検討する。金水(1982、2006)は、「ゐる」は単独では存続の意味を表せず、「一たり」「一たまへり」等を付加しなければならないこと、また、源氏物語の「一ゐる」を、「たり」が接続するかしないかによって二つに分け、接続しない例が多い動

詞は「運動・動作」を表す動詞であり、接続する例が多い動詞は「精神活動・言語行動」を表す動詞であることを指摘している。「卑下す」は「精神活動・言語行動」に属することから、「一ゐたり」の敬語形ではなかろうか。

「ものす」単独の場合も、以下のような例が見られる。

- (13) (太政大臣ハ) 世の中すさまじきにより、かつは籠りゐたまひしを、とり返しはなやぎたまへば、御子どもなど沈むやうにもものしたまへるを、みな浮かびたまふ。

〈濔標2-283〉

(13) は太政大臣が政界に復帰し、不遇だったその子息たちも、今は出世したという場面である。この「ものしたまへり」は存在を表す動詞であると思われる。「ものす」は何の代用かと考えると、「ゐる」の代用ではあるが、「じっとする」の意味ではなく、「り」を後接することによって、「ゐたり」と等価になり、動詞の存続を表す。

従って、(12) の「卑下しものしたまへる」について、「ものす」は「ゐる」の代用であるが、「ものす+り」で存続を表し、補助動詞であると考えられる。

次に、「大人ぶ」の例も同様に動作の存続を表していると思われるが、「り」が後接していないため、被代用語形の判断が難しい。

- (14) [源氏→明石の君] 「……(紫の上ハ) さうざうしくおほゆるままに、前齋宮のおとなびものしたまふをだにこそあながちに扱ひきこゆめれば、ましてかく憎みがたげなめるほど(=明石の姫君)を、をろかには見放つまじき心ばへに」など、女君の御ありさまの思ふやうなることも語りたまふ。 〈薄雲2-428〉

(14) は源氏が明石の姫君を紫の上の養女にしようとして明石の君を説得し、紫の上は一つ年下でしかなく、年齢が高い(大人である、大人になっている) 齋宮女御さえも養女として世話をしたと述べる場面である。動作主の移動もなく、「大人になって、じっとしている」とも解釈できず、補助動詞であると想定できる。

同じ補助動詞であると考えられる「大人ぶ」に後接する「おはします」の例も1例ある。

- (15) 大臣(=源氏)ぞ、なほ常なきものに世を思して、いますこし(帝ガ) おとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなむと深く思ほすべかめる。

〈絵合2-392〉

(15) は源氏が、帝がもう少し大人になったら出家しようと考えている場面である。この例の「大人ぶ」にも「り」が用いられない。そうすると、(14) (15) の被代用語形は「ゐる」であると考えられるが、その場合の「ものす」「おはします」は状態の存続だけを表すと思われる。

以上のように、グループⅣの「一ものしたまふ」は、「一來」「一行く」の敬語形と見る

べきものと、「一ゐる」の敬語形と見るべきものがある。ただし、「ゐる」には状態の存続を認めなければならない例もある。

#### 4、「一ものせらる」

次に、尊敬の助動詞「らる」を用いる「ものせらる」を検討する。「一ものせらる」は2例あり、前項になる動詞は「集ふ」と「入る」である。

まず、「集ひものせらる」の被代用語形を考えると、「集ふ」には「ゐる」が後接する例が1例あり、「ゐる」だけに前接するグループⅡの動詞である。

(16) しばし聞きたまふに、この近き母屋に（女房タチガ）集ひゐたるなるべし、うちささめき言ふことどもを聞きたまへば、  
〈帚木1-94〉

(16) は女房たちが集まっているので、話す声が聞こえると述べる場面である。「集ひゐる」は「集まって、そこにいて動かない」の意味である。(17) の「集ひものせらる」は薫が源氏の死後の六条院の女君たちについて述べる場面であり、女君たちはかつて六条院に集まっていたと述べる。「集ひものせらる」も「集まって、そこにいて動かない」の意味であり、「集ひゐる」の敬語形であると考えて問題ないようである。

(17) [薫→中の君]「……。かの御あたりの人は、上下心浅き人なくこそはべりけれ、方々（＝六条院ノ女君タチ）集ひものせられける人々も、みな所どころあかれ散りつつ、……」とて泣きたまへるほど、  
〈宿木5-396〉

次に、(18) の「入りものす」の被代用語形を考える。「入る」は「来」にも「ゐる」にも前接し、「入り来」が12例、「入りゐる」が8例あり、「来」にも「ゐる」にも前接するグループⅢの動詞である。

(18) 《（朧月夜ガ）かく一所におはして隙もなきに、（源氏ガ）つつむところなくさて入りものせらるらむは、ことさらに軽め弄ぜらるるにこそは》、と思しなすに、  
〈賢木2-149〉

(18) は弘徽殿太后が、朧月夜が自分と同じ邸にいるのに、源氏が無遠慮に忍んで来ることについて怒る場面である。「入り来」は「入って来る」の意味であり、「入りゐる」は「入って、そこにいる」の意味である。(18) に動作主体の源氏が移動するため、被代用語形は「入り来」であると言える。

グループⅢの被代用語形について、(7)「出づ」と(17)「入る」は「来」「行く」にも「ゐる」にも前接するにもかかわらず、「一ゐる」ではなく、「一來」の敬語形である。「一おはす・おはします」の通常語形も「一來・行く」で「一ゐる」の敬語形の例がない。な

ぜこのような傾向があるかという、「ゐる」には「たまふ」「らる」が後接できるため、「一ゐる」の敬語形は「一ゐたまふ」「一ゐらる」で表すことができるのに対し、「来」「行く」には「たまふ」や尊敬の助動詞「る・らる」が後接しないため、敬語形にする場合には「ものせらる」「ものしたまふ」「おはす」「おはします」の形をとるしかないからである。

以上のように、「一ものせらる」の被代用語形の傾向は、「一ものしたまふ」との差は特に見られないようである。また、敬意差については、(18)は弘徽殿太后から見ると敵対関係にある源氏が動作主体になるため、「一ものしたまふ」より敬意が低いと思われる。

## 5、「一ものせさせたまふ」

次に、尊敬の助動詞「さす」を用いる「ものせさせたまふ」を検討する。「一ものせさせたまふ」は3例あり、前項になる動詞は「訪ふ」「伝ふ」「思ほす」である。すべて「来」「行く」「ゐる」に後接した例がないグループⅣの動詞である。

(19)〔柏木→母北の方〕「かくて（落葉の宮ヲ）見棄てたてまつりぬるなめりと思ふにつけては、……。御心ざしありてとぶらひものせさせたまへ」と、母上にも聞こえたまふ。〈柏木4-312〉

(20)〔源氏→大宮〕「……。よろしうものせさせたまひければ、なほかう思ひおこせるついでにとなむ思うたまふる。（内大臣ニ）さやうに伝へものせさせたまへ」と聞こえたまふ。〈行幸3-302〉

(21)〔源氏〕「我もいと心地なやましく、いかなるべきにかとなんおぼゆる」とのたまふ。〔惟光〕「何か、さらに思ほしものせさせたまふ。さるべきにこそよろづのことはべらめ。……」など申す。〈夕顔1-176〉

(19)は柏木が自分の死後の落葉の宮を心配し、母北の方に世話することを願う場面である。(20)は源氏が内大臣に腰結いの役を頼んだが、大宮の病気を口実に断られたので、大宮に内大臣への仲介を頼む場面である。(21)は夕顔の死後、惟光が源氏に、自分が万全に始末すると言う場面である。

以上3例の被代用語形を考えると、(19)は動作主体の移動があるため、被代用語形は「訪ひ来」であろう。しかし、(20)(21)は「来」「行く」「ゐる」の被代用語形の複合動詞が見当たらず、(20)の「伝ふ」は「ゐたり」にも前接しない。(21)に関しては「思ひゐたり」の例があるが、前項にも後項にも敬意が付加されることから、一般的ではないように見える。注釈書も、(20)について、新全集は「「ものす」の代動詞を加えたのは、「伝へ」事のみならず善処を願う気持ちをこめた。」と注釈をしている。(21)については、「思ほ

しものす」で一語。あれこれと考え込むの敬語。」と注釈をしている。複合語として捉えようとするのが分かるが、被代用語形についてはふれず、説明としては不足がある。

複合動詞として捉えるには、「来」「行く」「ゐる」以外の被代用語形を考えてみたい。では、「ものす」はどのような動詞の代用になるのだろうか。源氏物語の会話文中、独立動詞であり、敬意の補助動詞や助動詞が後接しない単独の「ものす」51例を検討した結果、「来」が12例、「行く」が7例、「あり」が12例ある他に、「言ふ」が6例あることが注目される<sup>(注9)</sup>。

(22) [惟光]「……、かの尼上いたう弱りたまひにたれば何ごともおほえずとなむ申してはべりし」と聞こゆれば、[源氏]「あはれのことや。とぶらふべかりける。などかさなむものせざりし。……」とのたまへば、〈若紫1-236〉

(22) は惟光の発話に対して、源氏がなぜそうと言ってくれなかったと話す場面であり、「ものす」は「言ふ」の代用である。

こうした例があることから、(20) (21) の「ものす」も「言ふ」の代用ではなかろうか。(20) について、「伝へ言ふ」の例はないが、「言ふ」の客体敬語を用いる「伝へ聞こゆ」「伝へ申す」の例はあり、その可能性が充分考えられる。

(21) について、まず、「思ひ言ふ」が13例あり、それが被代用語形である可能性が考えられる。次に、源氏の発話について、源氏は自分の思うこと（とおほゆる）を言う（とのたまふ）ため、惟光の発話はそれをうけ、「何を思ひ言ふのか」と述べる蓋然性が高い。

更に、「思ほしものせさせたまふ」のような形はすなわち、前項にも後項にも敬意が附加される両項敬語形である。源氏物語に両項敬語形の「敬語独立動詞 + 敬語独立動詞」の例が74例あり、そのなかに「おほしのたまはす」が24例、「おほしのたまふ」が43例、「おほほしのたまふ」が2例あり、全体の93%をしめる。また、「思ひ言ふ」の敬語形として、「思ひのたまふ」が6例しかないのに対して、69例ある両項敬語形はかなりの慣用表現であると言える。従って、「言ふ」の代用に「ものす」を用いた「思ほしものせさせたまふ」は「思ひ言ふ」の敬語形であると考えられる。

以上のように、「一ものせさせたまふ」の被代用語形については、「一ものしたまふ」と異なり、「言ふ」が想定される例もある。また、敬意差については、最高敬語「させたまふ」を用いるため、「一ものしたまふ」より敬意が高い。

## 6、「一ものす」

最後に、敬意がない「ものす」を検討する。「一ものす」は4例あり、前項になる動詞

は「移ろふ」1例、「訪ふ」2例、「思す」1例である。

「移ろひものす」の「ものす」はどの動詞の代用なのかを考えると、「移ろふ」には「行く」が後接する例が1例あり、「行く」だけに前接するグループIの動詞である。

- (23) 紫の上にも、御消息ことにあり。〔朱雀院〕「幼き人（=女三の宮）の、心地なきさまにて移ろひものすらむを、罪なく思しゆるして、後見たまへ。……」とあり。

〈若菜上4-75〉

(23)は朱雀院が紫の上に手紙を出し、降嫁した女三の宮の世話をお願いする場面であり、「移ろひものす」は六条院に移って行くということであり、被代用語形は「移ろひ行く」であろう。

次に、「訪ひものす」と「思しものす」の「ものす」はどの動詞の代用なのかを考えると、「来」「行く」「ゐる」にも後接した例がないグループIVの動詞であるため、移動の意味があるかどうかを確認する。

- (24) 〔薰→僧都〕「……。〔浮舟トノ〕親子の中の思ひ絶えず、〔中将の君ガ〕悲しびにたへで、とぶらひものしなどしはべりなんかし」などのたまひて、

〈夢浮橋6-379〉

- (25) 〔薰→中の君〕「……。なほ、宮に、ただ心うつくしく聞こえさせたまひて、かの御気色に従ひてなむよくはべるべき。さらずは、すこしも違ひ目ありて、心軽くもなど〔匂宮ガ〕思しものせむに、いとあしくはべりなむ。……」

〈宿木5-426〉

(24)は薰が僧都に、浮舟が出家したら、母君が会いに行くと言ふ場面であり、動作主体の移動があるため、「行く」の代用であろう。

(25)は薰が、宇治と一緒に連れて行ってほしいと言ふ中の君に、匂宮が悪く思われると、不都合が生じると述べる場面である。動作主の匂宮の移動も発話もなく、「思って、じっとしている」とも解釈できないため、「思ひ来・行く・言ふ・ゐる」では考えられない。また、匂宮が思っている状態を仮定している例と見るのも自然ではないため、補助動詞とも考えにくい。被代用語形を特定することはできないが、例えば「思ひ寄る」(100例)、「思ひなす」(57例)、「思ひなる」(41例)のように、匂宮が思うようになる意を表す語の代用として用いられたと考えたほうが理解しやすい。

以上のように、「一ものす」の被代用語形については、「一ものしたまふ」との傾向の差は特に見られないようである。

## 7、「ものす」の敬語体系

中村（1976）では、地の文における単独の「ものしたまふ」を調査した結果、ほとんど「あり」の敬語形であり、「あり・ものしたまふ・おはす・おはします」で一つの体系になると指摘している。

本稿では、動詞連用形に後接する「ものしたまふ」を調べた結果、その被代用語形の傾向は、動詞連用形に後接する「おはす・おはします」と一致することで、一見中村（1976）の指摘と同じ結果である。しかし、「一ものす・一ものせらる・一ものせさせたまふ」も同じ傾向を表し、全体的には、独立動詞「来」「行く」「ある」「言ふ」の代用になる。

「来」「行く」「言ふ」には「たまふ」が後接しないため、敬語独立動詞より低い敬意の敬語が必要な場合、代わりに「ものしたまふ」を用いる可能性が考えられるが、「一ものす」はなぜ同じ傾向を示すのかという問題が残る。例えば「渡り来」には「たまふ」が後接しないため、「たまふ」をつけるには、「渡りものしたまふ」にしたと考えると、「移ろひ行く」という無敬表現の形は特に問題ないにもかかわらず、「移ろひものす」を用いるのはなぜなのだろうか。5節で、単独の会話文中の「ものす」には「来」「行く」「言ふ」の代用が多いことを確認した。動詞連用形に後接する場合も、単独の「ものす」と同じ傾向を示しているだけなのではなかろうか。「ものす」は代動詞として、「来」「行く」「ある」「言ふ」の代用として用いられていると考えられる。

## 8、おわりに

本稿では、動詞に後接する「ものす」が複合動詞の後項か、補助動詞か、また、どの語の代動詞なのかについて、前項になる動詞を調査することを通して探り、以下の結論を得た。

- 1、「来」「行く」だけに前接する動詞の例しかないグループⅠの「ものす」は、「来」「行く」の代動詞である。
- 2、「ある」だけに前接する動詞の例しかないグループⅡの「ものす」は、「ある」の代動詞である。
- 3、「来」「行く」にも「ある」にも前接する動詞の例のあるグループⅢの「ものす」は、「来」「行く」の代動詞である。
- 4、グループⅣの「一ものす」は、動作主の移動があれば、「来」「行く」の複合動詞であり、動作主が動かないでいる場合は、「ある」の複合動詞である。また、動作の

存続を表す場合も「ゐる」の代動詞であると考えられるが、その場合の「ものす」は「動かないでいる」の意味がない。

5、「ものす」の複合動詞は、「一ものすく一ものせらるゝ一ものしたまふく一ものせさせたまふ」の順に敬意が高い。

要するに、「一ものす」は複合動詞の後項ととらえるのが原則で、動作主の移動がある場合は「一來」「一行く」であり、動作主が動かないでいる場合は、「一ゐる」である。また、動作の存続を表す場合に限って、補助動詞であると認められるが、源氏物語にはわずか2例（(12) (14)）しか見られない。

本稿は、「ものす」が動詞連用形に後接する場合、被代用語形を考察することにより、存在・移動・発話などの例を観察できたことから、「ものす」は補助動詞ではなく、複合動詞の後項である蓋然性が高いことを提示した<sup>(注10)</sup>。

## 注

- (1) 他の古語辞典も、動詞の連用形に付く場合は、補助動詞として、「その動作をする意を表す」（『ベネッセ古語辞典』、「ものす」の項目）、「その動作をしたり、その状態になったりする意を示す」（『三省堂詳説古語辞典』、「ものす」の項目）と指摘している。
- (2) 古代の複合動詞の存否を論じる先行研究は多いが、本稿はひとまず形の上で「動詞連用形+動詞」になるものを複合動詞と呼ぶ。また、「動詞連用形+動詞」の後項に、より補助動詞的なものと、より独立動詞的なものがあると指摘されているが（大木2018）、本稿は被代用語形に注目し、形の差異がみられない場合、一括して扱う。
- (3) 検索条件:「品詞:動詞、活用形:連用形」+「語彙素読み:モノスル」。なお、以下のものは除いた。  
①「立ち寄りものす」のように、3つ以上の動詞がつながるもの。②「急ぎ一」のように、動詞連用形の副詞法であると思われるもの。
- (4) 「おはす・おはします」の通常語形に「あり」もあるが、「あり」は動詞連用形に後接しないため、「一おはす・おはします」の通常語形にならない。
- (5) 源氏物語に「訪ひものす」の被代用語形は見られないが、古今和歌集には以下のような例がある。「訪ひ来」はこの例と十訓抄に1例ある。また、類語の「訪（おとな）ひ来」は1例、「訪（と）ひ来」は4例ある。

わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門 〈古今和歌集、雑歌下371、982番歌〉

- (6) 源氏物語に「語らひものす」の被代用語形は見られないが、今昔物語集には以下のような例がある。「語らひ行く」は今昔物語集に4例がある。「語らひゐる」も1例あるが、移動しない場面である。「語

らひ来」は見当たらなかった。

安高、「……」ト云へバ、女咲タル音ニテ、「……」ト答フル、極ク愛敬付タリ。此ク互ニ語ヒ行ク程ニ、近衛ノ御門ノ内ニ歩ビ入ヌ。  
 〈今昔物語集、巻第27・第38〉

- (7) 源氏物語に「進みものす」の被代用語形は見られないが、宇治拾遺物語には以下のような例がある。また、「進み行く」も今昔物語集に1例あるが、「進みゐる」は見当たらなかった。

利仁うちほほゑみて、「何事ぞ」と問ふ。おとなしき郎等進み来て、「……」といふ。

〈宇治拾遺物語、巻第1・18-58〉

- (8) 源氏物語に「隠ろへものす」の被代用語形は見られないが、紫式部日記には以下のような例がある。「隠ろへゐる」はとはずがたりにもう1例ある。「隠ろへ来・行く」は見当たらなかった。

殿 (= 道長)、例の酔はせたまへり。(私ハ) わづらはしと思ひて、かくろへゐたるに、

〈紫式部日記、217〉

- (9) 地の文は中村 (1976) の指摘の通り、ほとんど「ものしたまふ」であり、「あり」の敬語形であるため、会話文だけ調査した。「ものす」はどの動詞の代用であるかについては、以下のように、動作主体の移動を表す場合、「渡る」「通ふ」などの移動の動詞の代用である可能性も考えられるが、一旦「来」「行く」に分類する。

「便なしと思ふべけれど、いま一たびかの亡骸を見ざらむがいと**いぶせ**かるべきを、馬にてものせむとのたまふを、  
 〈夕顔1-177〉

以下のように、動作主体の存在を表す場合、「ゐる」「ゐたり」などの存在の動詞の代用である可能性も考えられるが、一旦「あり」に分類する。

かたじけなき御座所なれば、ただ寄りゐたまへるに、故院ただおはしまししさまながら立ちたまひて、「などかくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて引き立てたまふ。  
 〈明石2-229〉

動作主体が発話する場合は「言ふ」の代用に分類し、それ以外は「分く」「頼む」「遣る」など、具体的な動作が考えられる例が11例ある。具体的な動作が考えられない場合、「す」に分類し、3例ある。以上の分類に、実際どの動詞であるかについては完全に一致しないかもしれないが、「移動」「存在」「言語行為」に属することは確かであると思われる。

- (10) 「おはす」「おはします」に関しても、動詞連用形に後接する場合、補助動詞と捉える立場もあるが、通常語形が想定できることから、複合動詞の後項である蓋然性が高いと考える (呉2017)。

## テキスト、索引

- 国立国語研究所 (2018) 『日本語歴史コーパス』 バージョン2018.03 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 阿部秋生ほか校注・訳 (1994) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』 小学館
- 中田祝夫、和田利政、北原保雄編 (1983) 『古語大辞典』 小学館
- 井上宗雄、中村幸弘編 (2003) 『ベネッセ古語辞典』 ベネッセコーポレーション
- 秋山虔、渡辺実編 (2008) 『詳説古語辞典』 三省堂

## 参考文献

- 今泉ひろみ (2005) 「『源氏物語』の表現方法—「ものし給ふ」と「おはす」の用法の違いについて—」『平安文学研究 生成』 笠間書院
- 大木一夫 (2018) 「文法形式としての古代日本語補助動詞」『訓点語と訓点資料』 140
- 小田勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』 和泉書院
- 金水敏 (1982) 「人を主語とする存在表現—天草版平家物語を中心に—」『國語と國文學』 59-12
- 金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』 ひつじ書房
- 呉寧真 (2017) 「動詞連用形に後接する「おはす・おはします」」『国語研究』 80
- 中村幸弘 (1976) 「「ものし給ふ」考」『国学院高等学校紀要』 16
- 東辻保和 (1997) 『もの語彙こと語彙の国語史的研究』 汲古書院

